

将来の豊かな生活に向けて
～キャリア教育の充実～

目次

- 1 研究のねらい
- 2 研究の経過と内容
 - (1) 小学部の研究より
 - (2) 中学部の研究より
 - (3) 高等部の研究より
 - (4) 訪問部たんぽぽ学級の研究より
- 3 今年度の研究における工夫
 - (1) お互いの授業から学び合う環境作り
 - (2) 職員同士が気軽に話せる場作り
 - (3) 研究通信「あたたかい研究」の発行
- 4 研究のまとめ
 - (1) 児童生徒の姿から学ぶ
 - (2) 「できる状況」の工夫
 - (3) 全校で研究を共有する

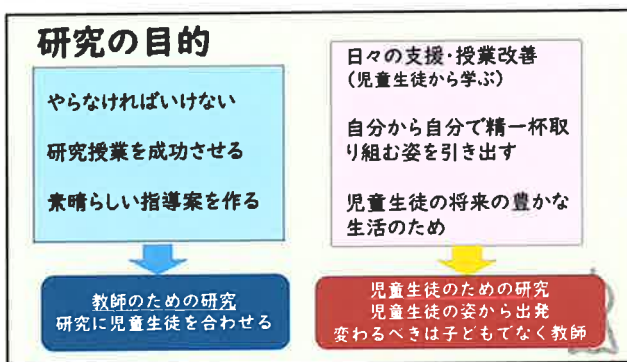
※資料1 研究通信「あたたかい研究」の例

※資料2 R4 安曇養護学校 キャリア教育発達段階表の例
(人間関係形成能力)

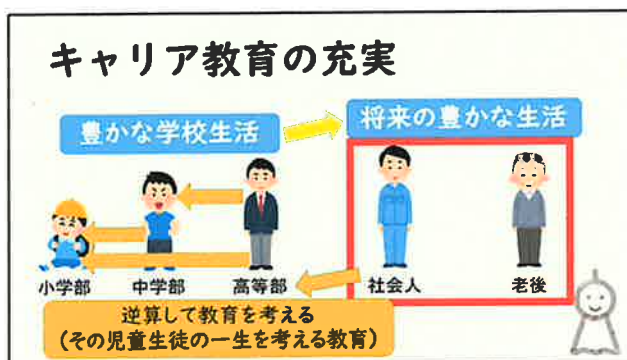
1 研究のねらい

本校では、学校教育目標「あかるく つよく みんなとともに みらいをひらこう」の下、「自分から自分で 精一杯取り組む」という子どもの姿を目指して教育活動を行っている。

年度当初の「研究はじめの会」において、全職員で「研究の目的」を共有する場を設けた。下記の図にまとめているが、「研究授業」や「指導案」等はあくまでも手段であり、「日々の支援・授業改善」「児童生徒が自分から自分で精一杯取り組む姿を引き出すこと」等を目的にし、児童生徒のための研究にしていくことを確認した。



また、本校では「キャリア教育」を研究テーマに据え、4年目になる。キャリア教育という「共通のものさし」を活用して教育活動を見返すことによって、小学部・中学部・高等部・訪問部たんぼぼ学級・寄宿舎がつながりを持ち、学校全体として児童生徒のキャリア発達に着目した研究が推進できると考えた。そして、「将来の豊かな生活」に向けて、卒業後の姿をイメージし、そこから逆算して豊かな学校生活を作っていく視点も大切に考えている。



研究を進める上で、授業において児童生徒の「自分から自分で精一杯取り組む」姿が見られたかどうか、まずは児童生徒の姿という事実を捉え、その背景にある「できる状況作り」や教師の支援について全校で共有し学び合うことを大切に考えてきた。

以下、各部の研究での学びをまとめる。

2 研究の経過と内容

(1) 小学部の研究より

小学部では、4学年の生活単元学習「サーキットをしよう」に焦点を当てて研究を行った。

Aさんの姿から学ぶ

Aさんは昨年度のサーキットでは、活動へのモチベーションが時間を追うごとに下がっていき、周回数も減ったという様子が見られた。

今年度のサーキットでは、授業開始前から「今日は8周走るぞ!」「やるぞ!」と張り切り、活動中は汗を拭いながら全力を出して走ったり、各コーナーでの活動に自分から意欲的に取り組んだりする姿が見られた。振り返りの会では、満足感に溢れた表情で目標を達成したことを喜ぶ姿が見られ、精一杯取り組んだことが伝わってきた。

Aさんの姿の背景にあるもの

このようなAさんの姿の背景として、「できる状況作り」が大きいと考える。サーキットの中で用意されていた「できる状況作り」についてまとめる。

①多様な活動の中で、子どもが選択できる状況

高さの異なる3種類の踏み台(写真)や、複数台用意されている自転車・三輪車コーナー、レベル分けされたサッカーコーナーなどで、子どもたちが選択して取り組む場が用意されていた。「自分で選択すること」は、活動のモチベーションになり、将来的に「進路決定」にもつながる大切なことだと考える。



②十分な活動量がある状況

活動の量や時間配分が子どもたちに合っていて、一人一人の子どもが自分の精一杯の力を出し切っている姿が見られた。「やらされている感」はなく、自分から意欲的に取り組み、十分な活動量が確保されていることが、満足感につながっていた。

③得意なこと、できることが一人一人に用意されている状況

用意されたコーナーが、苦手なものだったり、努力してもできないものだったりしたら、Aさんのような

姿は見られなかっただろう。「できる」が「やりたい」につながり、子どもたちの意欲に表れていた。得意なことやできることが用意されていれば、教師が何も言わなくても、子どもたちは自分から取り組むということ、子どもたちの姿から教えられた。

④一人一人のための声かけや支援をする人的環境

「できる状況」が用意されていても、教師が「早くやりなさい」「急いで」などと、不必要な声かけをしたのでは、台無しである。サーキットの授業では、教師が「指示や命令」をすることはほぼなく、あたたかい称賛や励ましの言葉がけをしていた。それが「できる状況作り」の人的環境としてとても重要であり、子どもたちが生き生き取り組む姿につながっていたと感じる。

⑤記録用紙で子どもの様子を記録、共有

小学部では、「生単記録用紙」を使い、子どもの様子を記録、共有している。そこには、願う姿、様子、子どもの願い、願い実現のための支援、次の時間に向けて子どもの目標や教師が意識することがまとめられている。子どもの願い実現のために、教師がどんな支援をし、どんな言葉がけをするかということも具体的に書かれており、これをツールにして、全職員がチームで子どもたち全員に共通した支援をしていくことにつながっている。

小学部段階で得意なことを生かし、「できた」という満足感に溢れる経験を積み重ねることは、中学部で「もっとやってみたい」という意欲につながっていくと考える。

(2) 中学部の研究より

中学部では、2学年の生活単元学習「みんなでモザイクアート〜かっこいい松本城を作ろう〜」に焦点を当てて研究を行った。

生徒の姿から学ぶ

授業では、一人一人の生徒が自分の作業に黙々と取り組んでいた。生徒全員が、「これが自分の得意な作業」だという意識を持ち、時間が来るまで精一杯手を動かしていた(写真)。振り返りの会では、それぞ



れのチームの頑張ったことの発表に対して、「〇〇さんすごいね!」「こんなに頑張ったんだね」といったように生徒同士で頑張りを認め合う姿が見られた。

生徒の姿の背景にあるもの

そのような授業の裏には、中学部の研究テーマでもある「生徒の願いを生かし、活動する喜びが実感できるための支援の工夫」があると考えられる。

①生徒の願いを生かした活動

中学部2学年職員は、昨年度取り組んだモザイクアートの経験をもとに、「みんなで一つのものを作る」ことに喜びを感じる生徒たちの願いを生かしたいと今年度の活動を考えた。「今年は去年よりもグレードアップしたモザイクアートを作るぞ!」という意気込みが生徒たちの姿から伝わってきた。経験をもとにステップアップする中で、「次はこうしたい」という願いを持ったり、更に主体的な姿が増えたりすることにつながっていた。

②活動する喜びを実感するための支援

中学部では、昨年度に続き「記録用紙の活用」を大切に考えている。作業後の記録用紙記入の場面では、生徒と担当の先生が話し合いながら、一緒に記入する場を設けていた。そこでは「今日は〇枚できたね。目標達成。すごい!」「とても集中して頑張ったね。どうして集中できたのかな?」「明日の目標は?」などと、肯定的な言葉がけをしながら、生徒の主体的な言葉を引き出すかわりが見られた。「できたことを認め、成功体験を積み重ねながら次につなげていく」という教師の支援は、生徒の活動する喜びにつながっていると考える。

③仲間とともに取り組む環境

今回の授業では、「みんなでモザイクアートを作る」という目標が全体で共有されていた。それにより、貼り絵、ちぎり、シュレッダー等作業が分かれていたが、どの生徒の作業も欠かせないものであり、お互いに尊重しようという意識が見られた。活動の中でお互いに認め合う経験を積むことで、それから先の人生においても他者を認め、尊重しようという意識が育っていくと考える。

中学部段階で「自分の得意なことを十分に発揮しながら、仲間と共に作業に取り組む」という体験は、高等部の作業学習を中心とした教育課程での主体的な姿につながっていくと考える。

(3) 高等部の研究より

高等部では、作業学習において、生徒が主体的に取り組み、達成感を味わうことができる製品や作業内容、支援方法、できる状況作りの工夫について研究を進めている。ここでは陶芸班の事例を取り上げる。

Bさんの姿から学ぶ

陶芸班に所属する1年生のBさんは、発語はほとんどないが、本人なりのジェスチャーや発声で意思疎通をすることができている。陶芸班の作業学習の中では、ほぼ教師の支援がない中でも、自分から作業に取り組む姿が見られる。90分間の作業学習の内、50分間程で2~4名の皿を製作し、10分間程で片付けをするという流れも身に付いている。振り返りの会では、自分が製作した皿をみんなに見せようとすることもあり、自分が作った物を人に伝えたいという気持ちが見られる。Bさんの姿からは「できる」自信、「人の役に立つ」喜びが伝わってくる。

Bさんの姿の背景にあるもの

陶芸班の作業に適応できるか心配されたが、陶芸班では、Bさんへの作業を支援するにあたり、次のように考えた。『今までのやり方や道具を使ってできるようにする』支援ではなく、Bさんが『できる』ということを繰り返しながら『わかる、できる、たのしい』ということが実感できるような作業工程を作っていくことが良いだろう。」それまでの陶芸班では、ほぼ全員の生徒が「同じ道具を」「同じように」使っていたが、Bさんの特性にあわせて道具を工夫したり作業工程を考えたりした。以下にまとめる。

①生徒が使いやすく、興味を持てる道具の工夫

粘土を伸ばす作業で、普通の伸ばし棒はBさんにとって使いづらいため、両手の握る部分がはっきりしており、少ない力でも使えるピザ用ローラーを使用した(写真)。ローラーにはBさんが興味を持っている乗り物の写真を貼った。また、たたら板にはBさんが好きな動物の写真が貼ってあり、「トラのところでやろう」などと声がけをすることで、Bさんにとって分かりやすく、見通しを持った作業につながっている。



②生徒が自分でできるための道具

形が出来上がったお皿を乾かす作業工程で、ドライヤーは重くて持つことに困難さがあるBさんに、ドライヤーを固定し、スイッチを押すとドライヤーが作動する環境を用意した(写真)。この「できる状況」があることにより、Bさんは自分から自分で作業に取り組むようになった。作業の終わりについては、タイムタイマーを自分で操作し、終わるタイミングについても職員の言葉がけなく自分で終わりにしている。



高等部の作業学習では、一人一人の生徒にとって有効な「できる状況」を用意している。それによりBさんの事例のように、教師の言葉がけがなくても自分から自分で精一杯取り組むという、本校の目指す生徒の姿が多く見られている。作業を生徒に合わせるのではなく、生徒に合わせて作業を変えていくという発想の転換は、全校で大切にしていきたい。作業学習で培った自信や自己肯定感、働く喜びは、卒業後の生活においても大切になることを、卒業生の姿からも強く感じる。

(4) 訪問部たんぼぼ学級(重度重複障害学級)の研究より

訪問部たんぼぼ学級では、今年度「音楽遊び」の授業に焦点を当てて研究を行った。

Cさん(高3)の姿より

Cさんは左腕を動かすことが得意で、ひも状の物を引っ張ったり、紙を握って破いたりする作業に取り組んでいる。見ることに困難さがあり、視覚的には明暗が分かる程度と言われている。そんなCさんが、音楽の授業では音楽を聞いて笑顔になったり、声を出して歌ったりしている。演奏の場面では、スイッチを使ってみんなと一緒にハンドベルを鳴らして演奏に参加した。自分でタイミングをみて手を動かしている様子もあり、演奏終了時には満足感溢れる笑顔が見られた。

Cさんの姿の背景にあるもの

①安心して授業に参加できる環境作り

音楽の授業は、毎回同じ歌から始まる。見ることに困難さがあるCさんは、始まりの音楽を手掛かりに、「音楽遊び」の授業が始まることが分かっている様子が見られる。他に、見通しが持てる視覚支援や、繰り返し同

じ活動をするなど、一人一人の児童生徒が「安心」して授業に参加できるためにはどういった支援が必要か、大切に考えている。

②「自分でできる」を実感できる役割

一人一人、自分の音のハンドベルを鳴らすという「役割」があった。引っ張ることが得意な Cさんは、引っ張りスイッチを引っ張るとハンドベルを鳴らす機器を使って鳴らした(写真)。Dさんは、両手にハンドベルを持ち、鳴らす方に顔を向けたり、教師の手を握ったりして、教師と一緒にハンドベルを鳴らした。それぞれの児童生徒が、自分が鳴らしやすいハンドベルを自分に合った方法で鳴らすことができる状況を用意した。「自分が鳴らしているんだ」という気持ち、「楽しい」「もっとやりたい」につながっていたと考える。



③その子なりの手段で「表出・表現・発信」をする環境作りと、かかわり手の支援

訪問部たんぼぼ学級では「主体的・相互的な関わり」を大切に考えている。児童生徒の様子を観察していると、一人一人自分なりの方法で表出・表現・発信をしていることが分かる。それを受け手としてどのように受け止め、どう返していくか。それが、次の「伝えたい」につながると考える。音楽遊びでは、素敵な音楽と一緒に楽しみ、共感していくことが大切だと感じている。

重度重複障害のある児童生徒にとっての「キャリア教育」をどう捉えるかということも全校で大切に考えている。音楽の事例のように、一人一人の児童生徒が、自分なりに表出・表現・発信をしたり、「できる」という喜びを感じたりすること、そして日々自分らしさを発揮して生きていくこと、それこそが、その児童生徒にとって大切なキャリア発達だと考えている。

3 今年度の研究における工夫

各部の研究における、児童生徒の姿と、その背景にある「できる状況作り」や教師の支援についてまとめた。近年、コロナ禍ということもあり、研究は各部毎に進めていく形をとっている。他の部はどのような研究、授業を行っているのか、どんな児童生徒の姿が

見られるのか、なかなか知る機会がなかった。そこで、少しでも職員が部をまたいで他部の児童生徒の姿や、お互いの実践から学び合うことができればと考え、研究係として以下のような工夫をしてきた。

(1) お互いの授業から学び合う環境作り

「キャリア教育」を大切に考えると、例えば小学部の児童が中学部、高等部に進学したらどのような教育課程で学ぶのか、小学部職員が見てイメージを持ち、その子の将来を意識して授業作りや支援の改善をしていくことは大変重要だと考える。その点で、小学部から高等部まで同じ屋根の下で学んでいる環境は、特別支援学校の強みだと言えるだろう。今年度、全職員がお互いの授業から学び合う環境作りで、以下の2つの方法を行った。

①一定の期間、いつでも参観できるようにする

小・中学部の生活単元学習や高等部の作業学習では、コロナ感染対策をした上で、一定期間いつでも参観ができるようにした。部内で体制的に抜けることができる時間があつたら、少しの時間でも参観に行き、日常の授業の様子を見ることが出来る。児童生徒の実態に配慮しながら、いつでも誰でも参観可能という開かれた教室環境は、他部の様子を知り、部のつながりを持つことにも有効だと考える。

②動画視聴による学び合い

生の授業を見合うことが難しいこともあり、授業を動画に撮り、サーバに専用フォルダを作って保存することで、いつでも見ることが出来るようにした。他部の授業を時間がある時に見て学ぶことができる。また、自分の学級の授業も、動画に撮って見ることで、新たな児童生徒の姿に気付いたり、見落としていた姿に気付いたりするという利点もあった。さらに、訪問部の授業動画も公開され、普段なかなか見ることのできない訪問教育での児童生徒の姿も見て学ぶことができた。

(2) 職員同士が気軽に話せる場作り

コロナ禍においては、部間で職員が話し合う場がなかなか取れない状況にあつた。コロナが落ち着いてきて、少しずつ話し合う場面も増えてきている。各部の授業の様子や児童生徒の姿などを気軽に話す場は、何よりの連携であり、全職員で全校の児童生徒とかかわっていくことにつながると考える。そのような場の一つとして、同好会「Azucafé(アズカフェ)」を立ち上

げた。月に1回程度、有志が集まり、お互いの実践や悩みについて気軽に話したり、その日のテーマについて語り合ったりする場である。部の垣根を越えて、様々な対話が生まれた。職員同士が気軽に話し、情報収集できる場の大切さを実感している。夏休みには「Azucafé サマーフェスティバル」を開催し、PECSやICT、医療的ケアについて学んだり、実際にコミュニケーションブックや支援機器を作ったりした(写真)。職員が主体的に学び合うことの楽しさ、大切さを味わう一日だった。



(3) 研究通信「あたたかい研究」の発行

今年度、「あたたかい研究」というタイトルの研究通信を月に2号程度のペースで発行してきた。(資料1) 部毎に研究を進める中で、各部それぞれの研究について、他部の職員は内容を知らずに終わってしまう状況があった。「あたたかい研究」では、各部の研究の様子や授業での児童生徒の姿、できる状況作りや支援の工夫などについて、まとめて発信した。研究テーマである「キャリア教育」についても、できるだけ分かりやすく、楽しく伝えるように工夫してきた。先生方から『「あたたかい研究」を読んで、キャリア教育が身近に感じられた』『楽しみにして読んでいる』といった感想が聞かれている。「情報の共有」や、「楽しい研究」に少しでもつながるツールになっていた嬉しく思う。

4 研究のまとめ

各部の研究を振り返り、本校が大切にしている点は各部共通していることが多いことが改めて分かった。以下の3点にまとめる。

(1) 児童生徒の姿から学ぶ

「教育の成果は子どもの事実のみ」

東京大学名誉教授の佐藤学先生が、今年度の信濃木崎夏期大学のご講演の中でおっしゃっていた言葉である。

授業で見られる児童生徒の姿には、「できた・わかった・またやりたい」という姿もあれば、「できない・わからない・もうやりたくない」という姿もある。その

「子どもの事実」から真摯に学び、その背景にあるものを考え、少しでも授業や支援の改善につなげることが、何よりの研究だろう。

キャリア教育の充実を研究テーマに掲げてから、毎年各部の児童生徒の具体的な姿をまとめた「発達段階表」を作成している(資料2)。各部の研究を通して、児童生徒の具体的な姿をまとめたものである。卒業後の姿については、卒業生のフォローをしている進路係の職員からも情報を得てまとめている。小学部段階から卒業後まで、児童生徒の発達段階をおおまかに捉えることで、見通しを持ちながら各部での教育活動を更に充実させるためのツールになっている。今後も、児童生徒の具体的な姿から更新していきたいと考えている。

(2) 「できる状況」の工夫

各部の研究で明らかだが、児童生徒の「できた・わかった・またやりたい」という姿の背景には、その児童生徒に合った「できる状況」が用意されていた。それがあすることで、児童生徒が「自分から自分で精一杯取り組む」姿が見られた。「できる状況作り」はグランドデザイン重点にも掲げられており、今後も全職員で更にその児童生徒に合ったできる状況を考えていきたい。

「できる状況」と一言と言っても、一人一人の児童生徒に合った「できる状況」がある。今年度の各部の研究からも、「選択できる状況」「得意なことを生かせる状況」「児童生徒の願いを生かす状況」「活動する喜びを味わえる状況」「使いやすく、興味を持てる道具の工夫」「その児童生徒なり的手段で発信できる状況」といった「できる状況」があることを学んだ。「できる状況」の目的は、児童生徒の「自分から自分で精一杯取り組む」姿を引き出すことを改めて全校で共有した。今後も、一人一人の児童生徒に合った「できる状況」をチームで考えていきたい。

(3) 全校で研究を共有する

それぞれの部での児童生徒の姿が、その児童生徒にとっての大切なキャリア形成の姿であり、それをつなげて学校全体で教育を考えていくことが、児童生徒の「将来の豊かな生活」に結びついていくと考察している。それがキャリア教育の充実において大変重要になる。3の「今年度の研究の工夫」に今年度の取り組みを記したが、この点は今後も工夫していきたい。また、視

野を広げ、県内外の他校の実践から学ぶ姿勢も大切にしていきたい。児童生徒の「自分から自分で精一杯取り組む」という姿を目指す以上、教員も「自分から自分で精一杯」学び続ける姿勢を忘れてはならないと考える。

学校という場で教育を受けることができる期間は限られている。そして、特別支援学校においては、高等部卒業後、ほぼ全ての生徒が一般就労や福祉就労、生活介護の場で、その後の長い人生を送ることになる。その人生に思いを馳せると、本校の研究テーマである「将来の豊かな生活に向けて」であったり、目指す子どもの姿である「自分から自分で精一杯」であったりは、一人一人の卒業生が自分の人生を豊かに歩いていくために大変大きな意味のあることだと考える。

「自分から自分で精一杯取り組む」という姿の背景には、「この活動はできそう、楽しそう、やってみたい」という心の動きがあり、「できる状況」があって実現していることは、各部の授業実践で明らかになった。児童生徒の視点から見ると、「自分でできた、楽しかった」という満足感は、きっと次の「またやってみよう」につながり、卒業後の「働いてみよう」「新しい場でも自分らしく楽しもう」「前向きに自分らしく生きていこう」という意欲につながっていくと考える。

学校生活の中で、どれだけ一人一人の児童生徒が「できた、わかった、またやりたい」と思える授業作りができるか、児童生徒の姿から学びながら、全職員でアイデアを出して取り組んでいきたい。

また、本校には、重い障害があり、日々生きることに精一杯の児童生徒がいる。中には、在学中に短い命を終えてしまう児童生徒もいる。その子たちにとっての「キャリア教育」はどのようなものかという問いも考え続けていきたい。その子たちにとっては、「将来」とは遠い先ではなく、明日であり、今日であると言えるだろう。「今日」が、その子にとってかけがえのない貴重な時間であり、「授業が楽しかった」「今日も良い一日だった」「明日も学校が楽しみだ」と思えるものであったかを、日々見つめ直していきたい。子どもたちの「将来の豊かな生活」につながる「今」を精一杯大切にしていきたいと思う。

あたたかい研究

NO.16 R4.11.30

文責:太田



「子どもの事実」に学ぶ（小学部研究授業より）

18日に小学部4学年の研究授業がありました。単元名は「サーキットをしよう」です。

対象児童のHTさんの姿から学ばせていただきました。

指導案によると、「今年のサーキットでは、活動の前半に全力で走り、後半は休憩を取ることが多かった。また、活動へのモチベーションが時間を追うごとに下がっていき、7～8周から5周に周回数が減った。」という姿があったそうです。さて、今回の授業では、自分で「8周」という目標を立て、「今日こそ8周！」と意気込んで授業に臨んでいました。（前日は7周）授業での姿は・・・



やる気まんまん
スタート！！



最近乗れるよう
になったと思えない
自転車さばき



次のコーナーへ
猛ダッシュ！



時間一杯やり切って
ゴールに倒れこむ



振り返りで、周回数を表す旗を数えると、9つ！！ 目標の8周を超えていました。HTさんのやり切ったドヤ顔が印象的でした。

昨年度からの変化を含めて、これが「子どもの事実」です。授業でも研究でも、成果は「子どもの事実」が物語っています。

この事実の背景には、小学部の研究テーマである「将来の豊かな生活につながる生活単元学習～子どもの願い実現に向けたできる状況作り」

がたくさんあり、学ばせていただきました。研究会で話題になったこともあわせて、紹介します。

①子どもの願い実現に向けたできる状況作り

子どもの事実の背景として、「できる状況作り」は大きいと考えます。

小学部で大切にされている「できる状況作り」について学びたいと思います。（計画案参照）

○多様な活動の中で、子ども一人一人が選択できるような状況

本時では、3種類の踏み台や、複数台用意されている自転車・三輪車コーナー、レベル分けされたサッカーコーナーなどで、子どもが選択して取り組む場が用意されていました。「自分で選択すること」は、活動のモチベーションになり、将来的に「進路決定」にもつながる大切なことだと考えます。



○十分な活動量がある状況

活動の量や時間配分が子どもたちに合っていて、どの子も自分の精一杯の力を出し切っている姿が見られました。「やらされている感」なく、自分から意欲的に取り組み、十分な活動量が確保されていることが、満足感につながることを学びました。



○得意なこと、できることが一人一人に用意されている状況

用意されたコーナーが、苦手なものだったり、できないものだったりしたら、本時のような子どもたちの姿は見られなかったと思います。「できる！」が「やりたい！」につながり、子どもたちの意欲に表れていたと思います。得意なことやできることが用意されていれば、教師が何も言わなくても、子どもたちは自分から取り組むということも、あらためて教えていただきました。



○一人一人のための声かけや支援（かかわり方）をする人的な状況

これも、とっても大事ですね。せっかく「できる状況」が用意されていても、教師が「早くやりなさい！」「何やってるの！急いで！！」などと、不必要な声かけをしたのでは、台無しです。本時では、先生方が「指示や命令」はほぼなく、あたたかい称賛や励ましの声かけをしていたのが印象的でした。それが「できる状況作り」の人的環境としてとても重要であり、子どもたちの生き生き取り組む姿につながっていたと感じます。まさに、「あたたかい支援」ですね。



②記録用紙で、子どもの様子を記録、共有→子どもの願い実現や支援に生かす



上記のことにつながりますが、小学部では、「生単記録用紙」を使い、子どもの様子を記録、共有されています。そこには、願う姿、様子、子どもの願い、願い実現のための支援、次の時間に向けて、子どもの目標や教師が意識することがまとめられています。子どもの願い実現のために、教師がどんな支援をし、どんな言葉がけをするかということも具体的に書かれており、これをツールにして、全職員がチームで子どもたち全員に支援していくことにつながると感じました。

指導主事井坪先生からも、この記録用紙があることで、「指導と評価の一体化」実現につながる。3観点での評価もあり、「よかった、頑張った」だけでなく、教科や自立活動の育ちの評価もできる。子どもが何を学び、何が身に付いたのか、客観的に示すことが大切。というお話をいただきました。

指導主事 井坪先生より

- ・自分たちで準備する姿が見られた。→どんな良いことがあるかを意味付けることが大切。（本時では、活動時間が増えた。）
- ・振り返りで、願いの達成を自己評価し、共有していた。全体で行う意味→振り返って共有し、周りの人から認めもらえる。 一つ一つの活動の意味を意識することが大切。
- ・さらに期待できる育ち→振り返りの場面で、近くの友だちと「ぼく○周したよ」「ぼく○周だよ」と伝え合う姿がみられた。この姿から、友だちとの関わりをねらっていけそう。振り返りの場面の他に、サーキットの中で、友だちと協力しないとクリアできないコーナーを設けるのも良い。



はなまるいっぱいボード
子どもたちの頑張りが伝わってきますね。

あたたかコラム

授業後、CTの後藤先生より、「予想しなかった子どもたちの姿が見られた」というお話がありました。

数日後、北安曇教育会の教育懇談会の中で、浅原会長先生がおっしゃっていた言葉と重なりました。「子ども達が教師の想像を超えていくのは、教師が共同生活者として子ども達と共に活動し、子ども達を信頼しているからこそ。」

そんな教師の姿勢が、「子どもの事実」につながっているのだと、あらためて感じました。

他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組み。

教育目標 あかるく つよく みんなとともに みらいをひらこう

目指す子どもの姿 自分から自分で精一杯取り組む姿

領域能力	小学部	中学部	高等部	卒業後
目標	①自分でできることが増える。(基本的な生活習慣) ②自分から進んでいろいろな遊びや学習に取り組む(興味・関心の幅) ③元氣いっぱい体を動かかし、丈夫な心と体を作る(情緒の安定) ④友達や先生と一緒に楽しく活動する(好ましい人間関係)	①心身ともに安定した生活を送る生徒 ②集団の一員としてもっている力を発揮する生徒 ③より自立的で、より豊かな生活を送る生徒	①自己肯定感が持てる生徒(自信を持つ) ②様々な人と共に生活を豊かにする生徒(社会性の育成) ③進んで社会参加する生徒(気力・体力・働く力の充実)	①自己肯定感や自信を持つ働く。 ②様々な人とかかわり、適切に相談や援助要請をしながら働く生活を継続していく。 ③自分から進んで社会参加し、生活を豊かにしていく。
観点				
人間関係形成能力	人とのかわり 自己理解 他者理解 集団参加 協力・共同 意思表示	○他者の活動に関心を持つ。 ○自分ができるときを選んで活動する。 ○他者の活動に関心を持つ。 ○グループで活動することができる。 ○他者に自分の仕事の一部をお願いする。 ○様々な場面で自分からあいざつする。	○様々な人とかかわり、人の話を聞いたり、自分の思いを伝えたりする。 ○自分がかかわったことやできていることを感じる。 ○様々な人と協力・共同して作業に取り組む。 ○必要な支援を適切に求めたり、相談したりする。	○職場の人と必要なやりとりをする。 ○自分の適性を見極めながら、できる仕事に取り組む。できないことは助けを求める。 ○職場のルールやマナーを守り、仲間と協力・共同して働く。 ○必要な支援を適切に求めたり、相談したりする。
あいざつ	○相手を意識してあいざつする。 ○場に合った服装ができる。	○様々な場面で自分からあいざつする。 ○発表時に丁寧な言い方を	○自分からその場にふさわしいあいざつを選んで	○自分からその場にふさわしいあいざつを選んで
場にに応じた行動			○敬語を使って伝える。 ○時間いっぱい作業に取り組む。 ○時間までに次の活動場所へ移動する。	○場にに応じた言葉を使って会話する。 ○時間いっぱい集中して仕事に取り組む。 ○遅刻をせずに職場に行く。